肺に血管肉腫病変を認めた犬の２例

2003.8 **動臨研合同カンファレンス要旨より**

【症例1】

柴犬，避妊雌，11歳齢。屋内屋外飼育，フィラリア予防毎年実施。1カ月前から発咳を認め，４日前から食欲が低下したため他院を受診し，胸部レントゲン検査で肺野に異常陰影を認め精密検査のため，当院を紹介され来院した。

【臨床検査所見】

身体検査では，体重8.4kg，削痩，体温39.8度，呼吸やや促迫。血液学的検査では，軽度の赤血球の大小不同と多染性が認められたが貧血は認められなかった。血液生化学検査では，AST，LDH および CPK のわずかな上昇が認められた。胸部 X 線検査では左肺中葉と後葉領域に均一に透過性の低下したマス像が認められた（図１）。胸部エコー検査では左肺中葉後葉領域に高エコーと低エコーが混在するモザイクパターンのマス像が認められた。以上の結果より肺の腫瘍を疑い同日に試験開胸を行った。

【治療および経過】

手術は全身麻酔下の仰臥保定で胸腹部正中切開アプローチで行った。開胸すると左肺後葉領域に暗赤色の腫瘤が認められた。腫瘤は左肺後葉が腫瘤化し中葉を巻き込んだ状態だった。肺腫瘤は心膜，胸膜および横隔膜と一部癒着していた。癒着を剥離して中葉と後葉の肺葉切除により腫瘤を摘出した。心臓や他の肺葉に肉眼的なマス病変は認められなかった。摘出した肺の腫瘤は450g（図２）で，割面は充実性で充出血が著明だった。病理組織検査では胸膜炎および肺原発と思われる血管肉腫と診断された。化学療法の実施を勧めたが飼い主は希望せず，退院後は主治医の元で対症療法のみ継続した。術後しばらくは一般状態は落ち着いていたようであるが，術後54日目に腎不全，73日目には貧血が認められ，　さらに術後84日目の X 線検査で左肺後葉領域に腫瘍の再発と思われるマス像が確認された。その後，術後102日目に呼吸困難により自宅で死亡したとの連絡を主治医より受けた。

【症例２】

ゴールデンレトリバー，避妊雌，９歳齢。屋内飼育，ワクチン，フィラリアの予防は毎年実施。５日前から発咳があり，昨日から食欲が低下したとのことで来院した。

【臨床検査所見】

身体検査では，体重33.0kg，中等度肥満，呼吸やや促迫，肺音やや粗励，心雑音は認めなかった。血液検査では明らかな異常は認めず。胸部 X 線検査では右肺中葉にクルミ大，後葉にチャボ卵大のマス像を認めた（図３）。

【治療および経過】

肉芽腫性病変や肺膿瘍あるいは肺腫瘍等を疑い抗生剤とアミノフィリンによる内科療法で経過観察とした。臨床症状は改善したものの，肺野のマス像は増大傾向がみられた，第32病日の時点で肺生検を兼ねた試験的開胸術を行った。全身麻酔下で行った。手術は仰臥保定で胸腹部正中切開アプローチで行った。脾臓にクルミ大の結節腫瘤病変が確認され部分切除により摘出した。肺表面には粟粒大から小豆大の暗赤色腫瘤が散在し，右肺中葉，後葉と左肺前葉内に硬結部を確認した。右肺の中葉，後葉，副葉を肺葉切除で摘出し，左肺前葉の先端部腫瘤は肺部分切除により摘出した。肺葉の腫瘤内には血餅が認められ，病理組織検査では肺内転移を伴う肺原発性を疑う血管肉腫と診断された。なお摘出した脾臓は病理組織検査で結節性過形成と診断された。手術後の治療は，静脈内持続点滴，鎮痛剤，抗生剤，アミノフィリンを投与し，術後９日目に退院した。病理検査の結果を待ち，術後14日目から化学療法として VAC 療法を行った。１クールとしてドキソルビシン20mg/m^{2}を21日毎に静脈内点滴，ビンクリスチン0.5 mg/m^{2}とサイクロフォスファマイド100mg/m^{2}を10日から11日毎に静脈内投与とし，計６クール行った。投与前には心電図検査および心エコー検査を行い，異常がないことを確認した。VAC 療法開始時（術後14日目）の X 線検査では左肺後葉領域にクルミ大の新たなマス像が確認された。VAC 療法２クール終了時（術後57日目）には左肺後葉のマス像が消失した。VAC 療法６クール目，術後133日目に肺野の状態は良好だった。以後は，ドキソルビシンによる心毒性を避けるためオーナーの希望もあり，化学療法を中止して様子観察とした。VAC 療法終了時から40日目（術後171日目）に１０日前から元気やや消失し昨日から食欲が低下したとのことで来院，呼吸促迫が認められ，X 線検査で右肺後葉に腫瘤の再発像が認められた。心電図検査では洞性の頻拍が認められたが超音波検査では異常は認められなかった。入院による持続点滴，抗生剤，ネオフィリン投与を行ったが，翌日（術後172日目）に呼吸状態の悪化により死亡した。解剖で肺全域に粟粒大からクルミ大の腫瘤病変が認められ，さらに右心耳内にも腫瘤が認められた（図４）。病理組織検査では肺および心臓右心耳はいずれも血管肉腫と診断され，原発は右心耳と推察された。

図1初診時胸部X線写真DV像（症例1）

図2 摘出した腫瘤（症例1）

図3 初診時胸部X線写真DV像（症例2）

図4 剖検時の右心耳内の腫瘤（症例2）